

第27回 2014年7月23日(水)

ゲスト 加藤信夫(関西テレビ 元取締役、スポーツ、報道、制作局長)

テーマ 放送史に残る名物番組を追う

テレビドキュメンタリー「一年一組」

従来の制作手法とは異なっただごく普通の“一年生の教室”を凝視

(1979年度文化庁・芸術祭ドキュメンタリー優秀賞受賞)

主な内容

- ◎ “なんとか問題”ではないドキュメンタリーを～「一年一組」～
- ◎ “神風”を見逃すな! ～教室の中にカメラ～
- ◎ みんな知らない秘境みたい
- ◎ “一番好きなシーンを切れ”～浦山監督の助言～
- ◎ 「あんな立派な教師ではありません」～鹿島先生から手紙～
- ◎ パターン化した番組作りを批判～加藤信夫のドキュメンタリー論～
- ◎ 津波で亡くなった男性教師の両親を追った作品に感動～石巻・大川小の悲劇～
- ◎ 競馬中継に新風～「ディレクターの俺に任せろ」～
- ◎ ゴールインにカンツォーネの曲を流す～桜花賞～
- ◎ 生放送なのに“生”に見えない不思議さ
- ◎ “恐怖”と向き合う番組作りを～加藤信夫の持論～
- ◎ 近寄らなかったカメラの良さが出たシーンが一番好き～「一年一組」～
- ◎ 最後のドキュメンタリー「雨～大台ヶ原の自然と人間」に人間嫌いのニュアンス滲む
- ◎ 周辺の“常識”とやたらに反旗を翻したドキュメンタリー「家」
- ◎ 前足バラバラの馬を中継カメラが追う
- ◎ ドキュメンタリーは「虚」の世界

～事実の一部であっても全体を通して真実というには抵抗ある～

司会 さて2時になりましたので、7月のメディアの会を始めさせていただきます。
暑い中を本当にご参加いただきまして、ありがとうございます。この部屋に入ると、本当にほっとする、そして、さあ話を聞こうかという態勢になっていただいていると思いますが。今日は関西テレビの元取締役、加藤信夫さんにお越しいただきました。お忙しいところ、ありがとうございます。

昭和40年、1965年に関西テレビに入社されまして、制作部、報道部、報道部といましても第2報道部、いわゆるドキュメンタリーなんかを作る部署。それからスポーツ部を経て、それぞれ各部の部長、そしてスポーツ、報道、編成の三つの局の局長を歴任されました。私の記憶では三つの現場の局長をされた方というのはあまりいないんじゃないかなと思います。平成14(2002)年取締役、17年から常勤監査役を務められまして、退任されたのは一昨年ですか。

加藤 いや、去年です。

——— 去年ですか、退任されたのは。

第2報道部時代に数々のドキュメンタリー番組を作られ、スポーツ部では競馬中継に新しい風を吹き込まれました。今日はこの二つのことを中心にお話を伺おうと思っています。最初にお話しいただきます、ドキュメンタリー「一年一組」は、昭和54(1979)年に放送されまして、芸術祭ドキュメンタリー優秀賞、ギャラクシー賞・選奨を受賞しています。

ある神戸の小学校のありふれた日常なんです、そこに様々な子供たちの出来事が綴られております。こんな風にご紹介すると、辣腕、キレ者、エリート社員というのを想像されるかも知れませんが、ご本人を前に言うのは恐縮なんですけれども、尊敬しておりますのは、私が昭和42年に入社した頃と、変わらず、先だって打ち合わせをいたしましたけれど、熱いハートと、とんがった物の見方をいまだに持っておられる。失っておられないんじゃないかなというあたり。なにせ、入社した頃の頃にですね、アナウンサーは週1回泊まりがありまして、よく議論を吹っかけられたり、私は新人でありましたので、たじたじとしながらも、なんとか応戦をしながら、いろいろなことを話していただいたり、それから、テレビというものについて随分、いろいろな話を伺ったり、こっちも言いたいことを言ったりした時代がありました。その頃の物の考え方といいますか、教わったことが、私のかかなりの根底になったんじゃないかなということで、この会にはぜひ来ていただきたいと思いご紹介したわけです。

という風に、先輩をかなり持ち上げておきまして、改めてご紹介します。

加藤信夫さんです。まずドキュメンタリー「一年一組」についてお話を伺おうと思います。

資料①「ドキュメンタリー番組『一年一組』のあらすじ」

②「加藤信夫氏のドキュメンタリー」に基づいて話し始める

< “なんとか問題” ではないドキュメンタリーを～「一年一組」～>

加藤氏 加藤信夫でございます。昭和 40 (1965) 年の入社、当時、最初は伝票処理のセクションに行き、半年で首になり、それで制作に行ったというわけです。制作では、当時ドラマをたくさん作っておいりましたから、ドラマの AD をずっとやっておりました。2 年半ぐらいして、報道部の中にあるスポーツ班への異動、突然、競馬中継担当はお前だということで、たった 1 人の競馬中継担当者ということになりました。これはまた後ほどお話をさせていただきますが、結局、5 年間スポーツにおいて、昭和 50 年報道制作部へ異動になりました。「ドキュメンタリーがやりたい」といって入社したわけですが、10 年経って、やっと念願のドキュメンタリー制作に関わることが出来るようになりました。もちろん当時はまだフィルムで、30 分のドキュメンタリーを作っていました。私はワイドショー番組「ハイ！土曜日です」のディレクター班の中におりましたので、いつもドキュメンタリーをつくれる状況にはありませんでした。昭和 54 年のこの「一年一組」の担当をするまでに、30 分のドキュメンタリーを 3 本制作していて、4 本目がこの「一年一組」ということになります。

ドキュメンタリーをやりたいと言って入ってきたのに、ドキュメンタリー、テレビ番組もそうですが、番組についての勉強ということが嫌いな方でして、本は一切読まないし、そういう感じの、ハウツー本も含めて、映画関係の本であるとか、そういうものも一切拒否をして、読まないということを貫いておりました。ドキュメンタリーのやり方等については、人に教わったこともないですし、自分流といますか、自分なりにやるということで、それまでもやってきました。当時の部長なんかは、非常に苦々しい思いで見えていたと思うんですが。

昭和 54 年の 4 月頃、今度の芸術祭参加のドキュメンタリーを、ネット番組なんですけど、お前がやれということになりました。これというネタがあるわけでもなくて、「ああ、そうですか」ということで、(制作に) 入ったわけです。制作に当たり、上司から言われた条件は二つ。一つは、ようやくビデオの時代になっていまして、わが社で初めてのビデオ取材によるドキュメンタリー番組にすること。それからもう一つは、構成者を誰かにお願いすること。番組を組み立てる構成者を外部から起用するというのは、それまでのわが社のドキュメンタリー制作ではない世界でした。この二つを条件に、何をやるかはお前が考えろということでした。いろいろと悩んでいたんですが、基本的に、私はドキュメンタリーというものが、その頃までに、各社、NHK も含めましていろいろと拝見していると、一つは事件もの、事故、平和、戦争、原爆、または公害、いわゆるなんとか“問題”とい

うものを取り上げるドキュメンタリー。もう一つは、常に変人・奇人が登場するドキュメンタリー。それから、障害者。障害を持っている方が登場する、そういうことが圧倒的に多かったように思います。それもそれでありなんでしょうが、私はある種、そういうことをやるのは嫌だという思いがずっとありました。特になんとか“問題”とかいうことをやるのが嫌だった。なぜかというのはいろいろあるんですが、とりあえず嫌だ。そうした中でネタを探すのにはどうしたらいいのかということを考え、いろいろと悩みました。

あるとき作家の灰谷健次郎さんをよく知っている、うちのディレクターがおりまして、今、専務をしている堤田君なんですが、彼が灰谷さんのところに、灰谷さんを中心にした教育の研究会というか、先生がいっぱい来ているから、いっぺん会ってみたらと言ってくれまして、会いに行ったんです。そのときに、灰谷さんではなくて、「一年一組」の担当教師である鹿島先生に初めてお会いすることになるんです。いろいろな話もして、あれ、これちょっと面白いんじゃないかと思いました。それで、よし教室を撮ろう。その先生のところに行って教室を撮ろうということを実は決めたわけです。それを決めたものの、スタートする前に、社内から「その学校、なんかあるんか」とか「なんかやるんか」とか「なんか起きるんか」とかいろいろ言われました。「いや、なにもないんです。特にありません」ということで。「それはなんとか学級とかいう、特殊学級なのか」「いやそんなことないです」「えっ」という、まあまあそういうことがありましたが、なんとかやりますわということではじめたわけです。

さて構成者ということで、誰にお願いしようかなと考えました。私は映画監督の浦山桐郎さん（1930～1985年）が大好きだったものですから、浦山さんの映画は全部見ていまして、それで浦山さんに突然電話でお願いしたんです。なんか無茶苦茶ですけども、そうしたらなんとか引き受けてくださったんですよ。

< “神風”を見逃すな！ ～教室の中にカメラ～ >

いよいよ6月から取材に入りました。神戸の長田にある志里池小学校の「一年一組」は鹿島先生の受け持ちだったものですから、その教室にカメラを持ちこみ、撮影を始めました。最初、とりあえず教室の中にカメラ（4分の3のビデオカメラ）を持ち込んだところ、これがね、子供たちはもう大騒ぎなんです。カメラが珍しいんですよ。そこで考えたんです。1週間、子供たちにカメラを触らせようと。子供たちは、カメラに触ったり、カメラを覗いたり、いろいろ毎日しているわけですが、1週間経ったら飽きるんですよ。なんや、こんなもんかということですね。それから、やっとカメラを回すことができるようになりました。初めてのビデオ取材ということで、一番助かったのは、（時間的な制約の多い）フィルム時代と違って、なんぼ回しても、また撮り直したらいいやみたいなことが出来ましたし、

音も同時に拾えているという機械（カメラ）ですから、非常にそれがありがたかったということはありません。ただまあ、映像的なキレが悪いということもありましたが、それを上回るメリットがあるなと思って撮り出しました。ところが、困ったことに、カメラマンが何を撮ろうか、と私に聞くわけですよ。ちょっと待って、何を撮ろうってー。しかしそのうち、なんか撮れるよというぐらいの感じで取材に入ったんです。何を撮るかということについては、これは例えば、日常ですね。子供たちの日常がずっと教室の中にあるわけですから。何か変わったことがあったら撮る、別に変ったことがあるわけではないです。そういうことでいろいろ試行錯誤しながら、悩み、撮影が始まっていたといってもいいかもしれません。

とりあえず子供と遊んでおこうかということをやっていたんですが、構成をお願いしている浦山桐郎さんが、突然神戸に来てくれましたね。「俺、構成者と言うとくわ」と言って、伝えてくれたのが、「おい、お前。よく見といたらな、神風は吹くぜ」、それは構成者の言葉でした。「えっ！神風は吹きますか」「絶対吹く。せやけどな、神風が吹いてんのに、お前見逃すなよ。大抵はな、見逃すからな。神風が吹いていたことが分からへんねん。お前、ちゃんと見とけ」。これが構成者の意見でした。

なるほど、そういうもんかと、そのとき思いました。物事をじっと見るということの中に、たぶん何か発見があるということですね。そういう風な目で子供たちなり、先生なり、学校の内外を見ていますと、これ面白いとか、これ、なかなかいい顔してるなとかいうことが、だんだん分かってくるんです。もちろんスタッフも分かってくるわけです。それを撮ったらいいんだということで、ちょっと気分も落ち着いてきました。ある種何を撮ったらいいんやという恐怖の世界から、これやったらいけるかなという感じが出てきました。それが7月、もう夏休み直前でしたね。それまでにいろいろシーンを撮っていたんですが、まあ飛び飛びで撮っていて、この番組一体どないなるんやろう、結論も含めて分からないわけです。取材から得たものを自分の中で積み重ねていく、映像も積み重ねていくということの中で、最後、何が分かるのかな、何が見えるのかなということですね。これはやり終わってみないと分からんなあということでした。

またこれも新しい不安といえば不安です、非常にプレッシャーに感じていたのをよく覚えています。

<みんな知らない秘境みたい>

そして子供たちの世界を見ておきますと、次第に、いろんなことが細々と起きる。先生がそれにどういう風に対処しているか。実は先生も知らないことがある。家庭、親も当然知らない子供たちの世界を。1年生ってこんな程度やろうなと思って

も、意外や意外、実に進んでいるといいますか、もう少し大人に近い感覚というのを持っている。それは最終的にね、全部取材が終わってから、私は、ある雑誌の人にインタビューされたときに言ったんです。これは日本に残された最後の秘境とちゃうかという感じでした。よくよく見ていると、やっぱりいろいろなことがありました。秘境というのはオーバーな言い方ですけど、「これ秘境やで。みんな知らへんわ」ということですね。そんな感じを次第に持つようになっていったということですね。

秘境という言い方でいうと、放送の中で使ったシーンもありましたが、使っていなかったシーンというのもあります。撮らなかったシーンもあります。

例えば、私がディレクターとして教室の中の、端っこにいて、休み時間になったら、皆、ワーワーと子供たちが集まってきて、女の子も男の子も私を囲んでね、ワーワーと遊ぶんです。窓際の壁にもたれて、皆が半円形になって遊ぶんですが、あるとき、私がこう後ろに手を回していましたら、私の手を、しっかりと握っている手があるんですよ。で、「ええ？」と思ったんですが、女の子なんです。その女の子は皆とワーワー言いながら、私の手を握っているんです。その子は、お父さんがいない子なんです。何食わぬ顔でね、皆でワーワー言いながらね、手は私の手を握っている。私は当然、知らん顔して。それは最初、ちょっとショックでしたね。

例えばそういうこととか、女の子には一番好きな男の子の名前を書きなさい。その逆もあって、投票させるんです、秘密投票を。私らもね、たぶんこれはこうやで、この子たちが人気やでとか、3番目とか4番目ぐらいまで名前を挙げて、だいたい分かる。女の子の好みというのは全部当たりです。しかし、男の子の好みが決まると違っただけには驚きました。男の子がたぶん、あの女の子が好きなんだろうと勝手に私らは予想していた。ところが、1位で断然、票を集めた女の子が、「やまもときょうこちゃん」という、いつも一人ぼっちで教室にじっと座っている子でした。学校へ来るときも一人ぼっちで来ている。この子も大変、家庭的には不幸な子でした。休みの時間も誰とも話をしないし、誰とも遊ばない。いつも教室にぼつんという。この子がね、断然、票を集めているんですね。これ一体何なの。これも最後の秘境やなと思いました。先生もびっくりしているんですね。男の子たちがその子に構うわけじゃないんです。別に遠巻きにしているだけでね。好きだからといって、関わるわけじゃない。全然、関わらない。

これも、一部をシーンの中には入れていますが、いろいろなことに関わっている間に、私らもさまざまな体験をしましたし、それが映像になんとか撮れていくというようなことでした。

苦労したのは、それまで何を撮るかということについて、なかなかそれが見えて

来ないときの苛立ちというか、情けなさといいますか、それには参りました。NHKのドキュメンタリー「友だち 100 人できるかな」という名作がありました。舞台は 1 年生の教室。それは全盲の女の子がね、普通の小学校に入学して、そのクラスを撮っている。これはやっぱりどう見ても撮りやすい（対象）なんですよ。なんぼでも撮れる。それは何を撮っても全部シーンになるわけですよ。これはやっぱり楽やなあという感じはありました。

< “一番好きなシーンを切れ” ～浦山監督の助言～ >

そしてもう一つ、苦労しましたのは、（私たちの取材班は）教育問題を撮っているわけじゃないという意識がありました。教育問題というと、いろいろな見方があるんですが、教育問題を撮るという姿勢ではない。だから、ますますドキュメンタリーとして（何をテーマにするかなど）なかなか整理が付かないということだったんです。

それでやっと 2 学期が始まって 9 月頃、もう編集に取りかからなければならない時期に来ましたので、取材を終えました。編集では、面白いなあというところを中心に選んで編集をして、構成もしたんですが。構成者である浦山さんが構成をなさるわけではなくて、お前がやれということで終わりなんです。まあ、それで私が構成もやりました。

初めてのビデオによるドキュメンタリーということで、ノウハウがないもんですから、4分の3のビデオテープを、どういう風に編集するのかということがなかなか難しく、この辺はたぶん使うだろうなというところを、とりあえず 2 インチのVTRテープに転写をして、それである程度、絞り込もうと思いました。

そして編集は、その 2 インチのテープを保存しておいて、2 インチテープからさらに 4分の3 にコピーして、その 4分の3 で編集することにしました。これは私も経験がなかったことですが、これが一番いい方法だろうと辿り着いたわけです。

とにかく 4分の3 のVTRで編集をやりましたが、番組の長さを 64分に仕上げるのに、あと 1分弱が切れないんです（短く出来ない）、苦しかったですね。もう七転八倒したんです、でも切れない。正確には 45、6 秒だったと思います。

真夜中に、編集室で、編集の高橋さんと 2 人でやっていたんですけど、どうしても切れない。それで 2 人とも編集室でひっくり返っていたんです。そしたら、酔っ払いの浦山桐郎監督が、ベロベロで夜中に現れてね、「おい、加藤出来たか」。いまだに覚えています。「まだ 40 何秒、切れないですよ。もう困りました」と。そのときに浦山さんがね、「もう一つお前に教えといてやる」。「え、何ですか」と聞いたら、「お前が一番好きなシーンを切れ」と言ったんですよ。好きなシーンを切れって、無茶苦茶言うなあ、そのとき思いました。浦山監督は、それだけ言って、またパーっと帰っちゃったんです。これも構成者の役割でね。

私らが浦山監督に教えてもらったのは、その二つなんです。いまだに私は感謝していますけれど、一番好きなシーンを切れとは、どういうことなのだろうと。

いつもさびしそうな顔で、だまって座っている女の子「やまもときょうちゃんのシーン」、実は私も好きでした、結局その子のシーンを泣く泣く落としました。ちょうど時間になるということで落としました。それで、通して見ていますと、「いける、落としてもいけるわ、切ったほうがきれいに流れるわ」という風になりました。

浦山さんというのは正直な人でしてね、後で私に教えてくれたのは、「浦山さん、一番好きなシーンを切れっておっしゃったでしょ。あれ凄いですね」と言ったら、「あれな、俺、今村昌平に教えてもらったんや」。兄弟子ですからね、今村昌平さん。「ああ、そうですか」と。

それは、浦山さんの監督第一作は、『キューポラのある町』でした。『キューポラのある町』は、「あれも、俺、編集に難儀したんや。時間がオーバーして」。「どうしたんですか」と言ったら、今村昌平がね、「おい、浦山、出来たか」と編集室に入って来た。「いや、出来ない」と言ったら、その今村監督が、あの当時、助監督かな。「お前が一番好きなシーンを切れ」とやっぱり言ったらしいんです。

それで、えらいこと言うなあと思ったんですけど、結局、火事のシーンを切ったというんですよ。『キューポラのある町』で火事のシーンがあるんですが、セットですが、燃やしたりして、金がかかっているわけですよ。それに大勢の人が出演しています。それを切った。そしたら、なんとかそれでいけたのですが、火事のシーンしか出ていない人も何人かいる。だから（映画の最後に表示される）スタッフロールには、出演者として載っているんですよ。でも「出てないやつがいっぱいおるんや」と言っていました。名前だけが出る。そういうようなことを、私は「一年一組」のときに教えていただいて、それが非常にありがたかったんですね。

<「あんな立派な教師ではありません」～鹿島先生から手紙～>

この「一年一組」を放送して、鹿島先生がすぐに手紙をくれまして。何て書いてあったかという、「私はあんな立派な教師ではありません」と。「あれは一体、どなたでしょうか」という風を書いてありましたね。これも面白いなあと思いました。といたしますのは、私ね、ドキュメンタリーは真実ではないと思っているんです。当然、（例えば、教室のある部分を）切り取ってきているわけですから、どこを使うかによって、全然事実とは違うことになるわけですね。それをよくドキュメンタリーは真実だとか、事実だとおっしゃる方もいますけれど、私は違う、あれは虚の世界だと思っています。虚の世界だからやらせがいいとか、そんな風には思わないですが、やらせというのは悔しいですから、しませんが。

そのあたりを、皆さん間違っているんじゃないかなと、いまだに思っております。鹿島先生の感想は当然のことですし、ドキュメンタリーとして考えた場合に「一年一組」という、私は舞台を与えられて撮っているんだと。たまたまそういう舞台を与えられて、それを撮って、何かを見ている人に示したい、何かを思っただきたいというぐらいの感じですね。はっきりしたテーマ、例えば「平和は尊い」とかですね、「教育はこうあるべきだ」とか、「身障者の人はこういうところが悲惨ではないか。なんとかしろ」とか、そういうことを伝えるのは、ドキュメンタリーとは違うような気がしています。

「一年一組」も教育問題ということではなく、それを舞台に借りて、見ている人が何かを感じてもらえればということで作ったつもりです。そこ（資料）にご紹介いただいている最後のナレーションというのはそういう意味合いで書いたつもりです。

〔結びのナレーション〕

どんな生まれ方をしても、どんな育ち方をしても、人間は平等なのだ
という信念をこの鹿島先生は持っている。

子供たちもまた、先生はどんな子にも平等に公平に接してくれる人だ
ということを直感的に信じている。

先生が子供たちに願うのは、自分のこと、自分の周りのことを正直に
見つめること、一人だけでは人間は生きていけないこと。

子供たちは決して裕福ではない。しかし初めての学校に入って鹿島先生
のように、自分の全部をさらけ出す男性に出会ったことは全く、幸福
であった。

子供たちが、ある種、カメラにではなくて、私らに対して非常にオープンになっ
てくれたということは、非常に、まあ子供たちというのはある種、動物の世界み
たいなもんですけれど、それは私らに対して同類だと思ってくれたというぐらい
の感じですね、だから撮影出来たのではないか、しかも、こちらが大きく構えな
かったというところで取材が出来たのでしょね。構えれば構えるほど、大掛か
りになればなるほど、こういうもの（教室の中の日常）は撮影出来ないだろうな
と思っていました。

振り返ってみると、そういうことで非常に怖い思いをしたということも事実です
し、ある種、予定をしていなかったということも事実ですし、たぶん最後はこう
なるだろうとか、こういう展開になるだろうなということが予測出来なかった
ことも事実です。まあ、予測してもしょうがないわけですが。そういう気持ちで
やったのが良かったかなと思います。だから最後のほうには、私は取材が大変楽
しくて、面白くて、ワーワーやっているとという感じで、最後は苦しまなかったと

思います。それは、次第に分かってきた、見えてきたということだろうと思います。

<パターン化した番組作りを批判～加藤信夫のドキュメンタリー論～>

皆さん、いろんなご意見があるでしょうが、結論が分かっているとか、流れが分かっているとか、予定稿的なものであるとか、予定調和的なものであるとか、ハッと驚くとか、喜ぶとかいうようなことは、取材としてはないわけです。そういうことはしたくないということが、なんとか通じてくれたのかなと今改めて思っているんです。

そういうことで「一年一組」は終わりました。さっき予定調和とかいろいろ言いましたが、ポスターといたしますか、キャンペーンといたしますか、こういうドキュメンタリーとはやっぱり違うんじゃないだろうかと、いまだに思っているところがあります。「戦争はいけない」とか「平和は尊い」というのは、これドキュメンタリーですかという風にやっぱり思います。

「原爆はけしからん」、これドキュメンタリーですか。それはキャンペーンじゃないんですか。一概にそれをノーというわけではないですが、それはやっぱり取材として、楽すぎるんじゃないか。最初から結論が決まっているわけですから。

「戦争賛成」という結論（で制作するん）だったら、これはやっぱりディレクターは大変だと思います。でもそんなことはありえないという前提で取材に入るということは、ある種、私は楽（取材が安易）ではないか。毎日、安眠できるんじゃないかなという風に思います。

外国の作品で、例えばチリの軍事政権に反対するデモを取材している、これなんかも実に楽に撮っていますよね。皆、絵になるわけですから。それで結論は決まっているわけですから。「軍事政権はけしからん」という。こんな楽なことでのいいの、と本当に思っています。私は報道するということの値打ちというのは、一方では認めながら、こういう取材スタッフの楽さというのは、許しがたいほど楽やなという風にやっぱり思います。「軍事政権は素晴らしい」という結論であるなら、私はもの凄い作品だと思います。

これはチッソのときも感じていましたし、公害のときも感じていました。いろいろなところで、私は何故そういうことをやりたくなかったかと、一つのことを象徴しているのかなあと思います。だからやっぱり、最近、ドキュメンタリーをいろいろ拝見はしますが、ディレクターはやっぱり楽しんでいる。「どこ悩んだの、これ」というのが圧倒的に多いと感じています。

例えば、人間国宝が今度引退なさる、そりゃ撮りやすいよなあ、絵になるし。あんまり考え悩むことはないんじゃないかという風に思います。昔もそうですし、今でも延々と続いているという風に私は思いますし、東北大震災のドキュメンタ

リーを見ていても、やはり同じように感じますね。東北大震災関連でたくさん見ましたけれど、2本、素晴らしいドキュメントがありました。それは残念ながら、2本ともNHKでした。本数が多いからということもありますがね。ほかのは全部パターンで取材している。このワンパターンはいったい何なんだという、恐ろしいぐらい（作り方が）パターン化していますね。

これはどこからきているのかというと、ニュース取材からきている。ニュース取材のパターン化というのは、いつ頃から始まったのか分かりませんが、このパターン化というのは今のノンフィクションにも、もの凄く影響してきています。ニュース取材をしているディレクターがドキュメンタリーを作りますと、同じパターンになるんですよ。自分が撮りたいもの、そして、要らないものが決まっていて、邪魔になるものは一切取材しないというパターンね。

中国の日本大使館の前でデモをしているシーンだけを撮る。その周りは撮らない。これが取材の大原則。誰が作ったというわけじゃないですが、そういう傾向が強くなっています。これがいまだに続いている一つの要因かなあとも思っています。まあ、ちょっとこれは愚痴になりますけれど。

—— NHKの面白かった番組というのは、どんなものですか。

<津波で亡くなった男性教師の両親を追った作品に感動～石巻・大川小の悲劇～>

加藤氏 これは、一つは原発最前線（南相馬）を撮ったもの、芸能関係のディレクターが撮った番組で、これは良かった。もう1本は、石巻市の大川小学校の悲劇を撮っているんです（東日本大震災での津波で全校児童108人のうち74人が死亡）。大川小学校の若い男性の教師、（死亡）のお父さんとお母さんを追っているんです。お父さんとお母さんは、申し訳なかったとひっそりと暮らしている。ご両親は畑を作っていて、あるとき、隣の畑に来たお婆ちゃんとちょっと話をするんです。そしたら、その息子さんが受け持っていた女の子のお婆ちゃんだったんですよ。ええ！という話になって。いつも、先生を囲んでいる子供たち、4年生ぐらいかな、皆でワーって飛び上がって喜んでる写真をその老夫婦は持ってきて、「どのお子さんですか」、「うちの孫はこれ。亡くなりましたけど」。これは私、ちょっと撮れないなと思いました。その方たちは、いろいろな花を作っている、慰霊の日に、小学校にその花を飾るのに出されませんかと言われるんですよ。それで大喜びでね、その花を軽トラックに詰め込んで、一緒に行きましょうって言われても、いや、わたしたちは、と、行かないのです。それを別の人が小学校に運んで、飾り付けをするわけですね。ところが、水やりが心配になって、夜中に密かにね、夫婦で行くんです。それをカメラは遠くから撮っている、これには、感動しました。

—— 夜ですから見えにくいですね。

加藤氏 もちろん。声も何も入っていない、ロングショット。それはやっぱり近寄ったらいけない。こういう感覚で撮影しているものがほとんどない。ということが非常に残念だったなと思っています。

ドキュメンタリーに関しては、そういう思いで制作していたところを、ちょっと申し上げました。

<競馬中継に新風～「ディレクターの俺に任せろ」～>

もう一つは、このドキュメンタリーを作る前ですが、私は昭和44年にスポーツ班へ突然異動になりました。競馬担当はお前だということで、新しいデスクの上に競馬の資料がドーンと積んでありましたが、私は競馬のケの字も知らなかったんですよ。競馬場に行ったことがない、馬券を買ったこともない、競馬中継を見たことがない。どない走ってんのか知らん。いうことで、翌週からもう中継車に乗って、仕事をしていました。人手不足も極まっていたのか、考えてみたら、無茶苦茶ですね。それで競馬中継をやり出したんですが、本当に私がびっくりしたのは、スポーツの中継、野球も含めて、映像をディレクターが作っていないということが分かったときです。(技術スタッフの)スイッチャーが勝手にボタン押して(映像を切り替えているんです)。なんだこれ、あかん。要するにテレビというのは映像と音声で(表現する)。それにディレクターが全然責任を持ってないのはどういうことかと思いました。生意気な頃で、よし俺が全部やると言って、ワンカット、ワンカット、全部指示をして、カメラの指示とスイッチングのタイミング、全部キューを出す(複数のカメラで撮影した映像から放送に使う映像をセレクト)ことに決めました。最初はもう技術が大騒ぎしましたが、「俺がディレクターだから、俺の言う通りにせえ」と言って(中継車内のディレクターの役割を徹底した)。技術スタッフは全部先輩だったんですが。

—— 加藤さんはその頃、いくつぐらいだったんですか。

加藤 26歳かな。

—— 皆、年上ですね。スイッチャーも。

加藤氏 それでまあ、皆、「よし、お前がそう言うんだったら、お前が全部やれ」ということになりました。ズームのタイミングから全部やると。肝心なところは全部カッ

ト割りをしました。そういうことで、競馬中継をやったわけですが、いまだに面白いなあと思うのは、カメラマンなんかも、やっぱりパターンで撮っていると全然面白くないんですよ。「そうか。そしたら、こんな面白い絵もありますよ」とどんどん売り込んでくるんです。おお、それ、ええやないかという風に。そのようにして、映像が立体的になってくるということを経験もしました。あの当時、まだ広い競馬場でカメラ3台でしたから。下見場で1台、放送席とレースのほうに時々向くカメラが1台、あとゴール前に1台。そんな悪い状況の中で、これを如何により多くのカメラで撮っているように見せるかというのは、ある種、ディレクターとしての腕の見せ所、面白さだったと思います。例えば、レースを見つめている人、私は下見場でね、発走直前の馬を必死になって見てる人の顔を撮ったりしていました。これは嘘なんですけど、まあいいかと思って、そういうこともやっていました。それともう一つは競馬のイメージというのを、いかにして高めるかということを考えてました。つまり、如何に競馬というものを上品なものにするか、または品格のあるものにするか、ということが使命だと思いました。競馬というのは、馬券を買って中年の男どもがというような世界ですから、如何に女性に広げるか、若者に広げるかということ、これを目標にしないとイケないという風に思いました。

<ゴールインにカンツォーネの曲を流す～桜花賞～>

なぜ私がいろいろなことを勝手に出来たかといいますと、ディレクターが一人だったからですよ。実質的にプロデューサーも兼ねているわけ。ADももちろん兼ねています。伝票処理から全部やっていたから。一人だから、会議も打ち合わせも何も要らない。俺の頭の中にあつたらええねん、ということですから、全然楽なんです。あとは当日のキューシートさえあれば放送出来る。だから手間がかからない。台本なんかとんでもないということですから、これは非常に楽でした。誰にも相談することはないわけですから、例えば部長であろうとデスクであろうと、一切相談しない。こんな楽なことはないなということで、ちょっと話が脱線しますけど。今、聞いたところ（競馬中継に関わっている）スタッフはもの凄いな数なんです。どの番組も凄いな数。打ち合わせも、台本も、会議も要ります。当然、上司にも報告しないとイケない。手間ばかりかかるというのが今の状況ですが、あの当時は、私がやりたいと頭の中で思っていると、やれたわけですから、こんなに楽なことはない。だから、例えば「プロデューサーを置こうか」「いえ、要りません」ということですから。それもまあ楽なことでした。一つ、私が自分でエポック的にやったことで思っているのは、昭和46年、ナスノカオリという馬が桜花賞を勝ち取りました。うちの会社にとっては、桜花賞、菊花賞というのは大きなイベント的なものですから、これはなんとか派手やかにしないという

ことで、ゴールインで音楽を入れようかなと思いつきました。生中継で音楽を入れるということは、見たことがないなあと。野球でも音楽なんか流れてない。しかし俺はやると。曲名は、ジリオラ・チンクェッティのカンツォーネで、「つばめのように」という曲が好きだったものですから、これにしようという非常に簡単なことで。これは誰かに言ったら反対するやつが出てくるな、言わないでおこう。一切言わない。言う必要のあるやつには全部口止めをする。というわけで、音声さん、オーディオさんには当然言わないと。実況との兼ね合いがありますから杉本清アナウンサーにも言わないと。あとは知らん。あとはMDの人。これだけ言って、当日、突然、生放送の有利さで、やってしまったということです。これね、反響がすごかったんですよ。内部的反響は、「なんということをして！」という。「何やっとなねん、あいつは」という内部的反響。それはフジテレビも含めて。ところがね、何日か経つと、一般の方から、いっぱいお手紙をいただきまして「良かったよ」というのです。

——— テレビを見ている人は。

加藤氏 そう。それがあると、面白いですね、社内も「あれ良かったな」と。どうなったんや。それほど既成概念というのは頑固なものなんですよ。常識というのは恐ろしいなど。常識を破るということは、やっぱりエネルギーが要るんですよ。非難されっぱなしということもありますし。

そういうようなことがありまして、それから桜花賞はいつも勝手に、オーディオさんに選んでもらうというのはとんでもない話で、自分で好きな曲を入れてやっていたわけです。

でもやっぱり、私は番組というのは個人のものだと思っていました。集団のものではない。グループのものでもない。それはディレクターのものじゃないのかという風に思いますから。

例えば出演者には全員ネクタイ着用、夏でも。それは競馬中継だから必要なこと。それと競馬中継だから必要なのは、花を飾る。花はなんでもいいんじゃない。これは桜花賞のときは桜の花を飾ります。菊花賞のときは菊の花を飾ります。宝塚記念は、私は7色のバラを飾ってくれと言っていたんですけど。そういう風に全部自分で決めていました。

それまでの桜花賞で私が不思議に思ったのは、表彰のときに競馬会から花束が騎手とか調教師さんに渡すとき、桜花賞なのに菊の花束なんですよ。競馬会に一体何をしてんのかと言いたい。(競馬会は)「いや、これはもうこうなってるんやから」とか言う。「なってんねんやから」では困る。それで勝手に桜の枝を1本。鈴木敏郎アナウンサーがいつも勝利騎手インタビューで下に降りていましたから、彼に

預けましてね。これを勝利騎手に渡して欲しいと。そしたら渡してくれたんですね。そのときの騎手が、馬上で桜の枝をかざしていたんですよ。これは良かったですよ。

それを勝手なこととしてとまた怒られましたが。すべてが万事、そういうことを、どういう風に競馬中継の方向から変えていくのかということだろうと思うんです。やっぱり変なところは変えたほうがいい。なぜそんなことが出来たかという、私は、競馬を別にやりたくなかったんですよ。いつでも降ろしてくださいと。いつ辞めさせてもらってもよろしい。お前は不適格だと言って、辞めさせてくれたら一番いい。私が一番助かるんです。スポーツから放り出されるのが一番いいんです。そういう気持ちですから、出来たんですよ。これが、競馬が大好きだったら、たぶんそんなことしてないと思うんです。

私は、好きこそものの上手なれ、というのは本当かなと疑っているところがありますね。好きだったら、あまり改革的なことはやらないですよ。なんとか、その部署におりたい。もうバラエティー大好き、バラエティーのところにおりたい、替わりたくない。そう思ったら、問題を起こしたらあかんわけですから。それはどの部署でも言えることだろうと思います。ですから、好きこそものの上手なれ、というのは本当かなあとやっぱり思っています。

後ほど、私がスポーツ部長のときに、皆に宣言をしたのは、阪神ファンには阪神の番組はやらせないということです。競馬ファンに競馬中継をやらせない。これは原則的にそうだ。そうでないと物事が見えないという風に私は思っていましたから。それは貫いたつもりです。

——— その競馬のときの出演者はどなただったんですか。

加藤氏 出演は森乃福郎さんとね、松本暢章アナウンサーだったんです。で、ネクタイ締めると言ったら、森乃福郎さんが怒りましてね。「なんでそんなもん、競馬でネクタイなんか」「だったら辞めてもらいます」と私ははっきり言いました。「もう辞めてもらってもいいです」。そしたら、「やります」。そういうことは何も遠慮することやないと思ったんです。

——— 森乃さんはそういうもんだと思っていたんですね。

加藤氏 競馬は楽な格好でいいやないのと（思っていたんでしょうね）。そういうことも、いろいろありました。

私はスポーツ中継、今もよく見ていますが、やっぱり一番気になるのは、カメラの台数が非常に多くなっていますから、視聴者が見たいと思うことをすぐ見せる

んです。でもそれは間違いだと思っています。見たい、見たい、見たいとある程度思わせてから、見せるべきだ。(視聴者が)見たいなあと思ったものをすぐ、パッと見せたら、見ている人は楽すぎる。見ている人は少し苦勞したほうが、視聴率も上がると私は思っていますから。だって、皆、寝転んで、見ている、分かるようなものだったら、次第に興味を失っていきますよ。やっぱり、ある程度、正座をするとまでは言いませんが、画面に引き付けられる要素というのは、一体、何なのかということなんです。自分の見たいものがすぐ見られるというのは非常に安直といいますか、本当に皆、望んでいるかということ、私はそうじゃないような気がしています。こんなにテレビが、まるで百貨店みたいに、サービス精神が旺盛になればなるほど視聴者は離れていくと思いますから。なんだか方向が、ずいぶん間違っているなというのが私の意見です。なんで皆、お金をかけて、そのサービスを一生懸命やるのか。「ちょっと違うんじゃないか、これ」ということを感じています。

<生放送なのに“生”に見えない不可思議さ>

もう一つ生意気なことを言いますと、生放送についてです。各社とも生放送の番組がいっぱいありますが、生放送に全然見えないという不可思議さ。

例えば、ワイドニュース、これ生放送なのか、録画なのか分からない。これ一体、何なの、皆さん上手です。司会者も上手ですし、コマーシャルの入れ方も上手ですし、とちりません。もう生とは見えない。生に見えないということは、生で放送しなくてもいいんじゃないかと思ってしまう。苦勞して生でやっているのに、生放送に見えていない。生が生であるように見えない(見せなきや)あかんのとちやうか。ニュースは特に生に見えなきやダメですよ。だからそれは、わざとでもいいから、生であるという風に見せるべきだ。ところが、スタッフがやっている努力の大半は、生ではないという風に見せる努力なんです。今の努力を見ていると、よく分からんというのが、私の今のテレビというものに対する一つの印象です。

だからノー編集(撮影してきた映像を編集しないでそのまま放送)で出せと言っても、よう出さへん。私はスポーツのときに、もうイライラしてうるさく言っていました、「間に合わなかったら、ノー編集で出せ。間に合うほうが大事やろ」

「いや、編集しないと」「編集していたら遅れるでしょう」というぐらいの感じがね(必要なんですよ)。今、何かちゃんと整えて、きちっとした服装で、きちっと最初から分かりやすいように作って出すというような流れになってきている、たぶん(生の)魅力はどんどん失われていっているという感じがしています。

そういうことを、現役時代にもいろいろ言っていました、みんなあまり聞く耳を持たれなかったという思いは、いまだに私には強くあります。今、フリーでテ

レブを見ているんですが、「ああ、やっぱりテレビってそうやなあ。こんなにハラハラドキドキしなくてもいいのになあ」という。そして「分かりやすいなあ。分かりやすいことは嘘が多いしなあ」と。分かりにくいことのほうが真実に近いわけですが。分かりやすいことって、嘘ばっかりやないの。しかしそれは、今の取材者が、または今の番組担当者が考えてやったことでなくて、(その背景には)ずっと積み重ねてきた歴史がある。

祇園祭のニュースを見ていると、笑っちゃうよ。毎年同じコメントが流れる、お前ら大丈夫かと思えますよ。撮る場所から、カットから (みな同じに見える)、撮らんでもいいのと違うの (と違ってしまふ)。もう不思議なことが多いですよ。

—— 打ち合わせのときに、異端を許さないテレビ局になってしまっているという話をしましたよね。

< “恐怖” と向き合う番組作りを～加藤信夫の持論～ >

加藤氏 昭和 40 年に入社した頃と比べますと、テレビ局は、ずいぶん組織も整備されて、大掛かりにもなり、社員教育もちゃんと出来てきたわけですが、大掛かりになって、会社も大きくなってくると、どんどん保守的にならざるをえないという感じがしてきます。守りに入るというのはどういうことかということ、そこそこきちっとやる、間違いのないようにきちっとやるということを、ディレクターまでが目標にしているという感じを受けるんです。それは安全範囲といいますか、それぞれ社員一人一人が自分の頭の中で決めてしまっていて、そこを踏み越えない。そうしないと出世は出来ないというのか、そういう感覚に常にとらわれてしまっているという感じが強いですね。

だから、それは逆に、ある種、恐怖に耐えられないというか、恐怖なんて番組作りで経験したくないということだろうと思います。考えなくてもすむという、楽さということもありますし、もうパターンの連続ですから。ドラマにしる何にしる、パターン、パターンでやっていけば、安心だしということが、特に社員の間に蔓延しているんじゃないかなと思います。冒険などんでもないということですね。冒険するということは、ある種、恐怖と鉢合わせになるわけですから。そんなのは嫌だ、喧嘩するのも嫌だということが、(テレビ) 画面にまで反映されているように思いますね。

—— ドキュメンタリーも含めて、恐怖という言葉が何回か出てきましたけれども、ドキュメンタリーを作っていたときの恐怖とはどういうものだったんですか。

加藤氏 その恐怖はね、果たしてこれで私の目指しているものに到達できるのかという恐

怖。だからそれは、他の人の恐怖じゃなくてね、怒られるかもしれないとか、そういうことじゃなくて。これでゴールに行けるかどうか分からないという恐怖。

—— ドキュメンタリー「一年一組」の取材期間は、7月から9月ぐらいまでですか。もう少し長かったですか。

加藤氏 6月に入り、飛び飛びに行っていましたからね。毎日というわけじゃもちろんないんです。9月の終わりごろでしょうかね。夏休みは当然、ほとんど行っていません。

—— その短い間に、何回も、さっき言われた神風が吹いたんですね。

<近寄らなかったカメラの良さが出たシーンが一番好き～「一年一組」～>

加藤氏 そうということになりますか。嬉しかったですね。私自身が一番好きなシーンは、2学期が始まって、子供たちの背が伸びたりしますので、先生が運動場で背丈の順に並べ替えをします。このシーンが一番好きなんです。それはなんで好きなのかというと、近くに寄って、撮ってないんですよ。あれは、たまたまカメラが間に合わなくて、もうここから撮ろうと、教室の窓から撮ったんですよ。それが結果的に良かった。近寄らなかった良さが、自然体が出ているなという感じでしたから、あのシーンが一番私は好きなんです。カメラが間に合っていると、近くに寄って、撮っていたかもしれませんよ。ディレクターはカメラマンが近づこうとするのを如何にして止めるかという感じでやらないとあかんよと、いつも後輩たちには言っていたんです。どうしても（被写体に）近寄りすぎる、行っちゃうんですよ。

—— 浦山さんから2回、良いことを聞いた。構成者を立てるとか、それを浦山さんにするとか、かなり面倒だとか、うっとうしいっていう感じはなかったですか。

加藤氏 うっとうしいとは思いませんでしたが、私も初めての電話で、面識があるわけでもないですから。震えながら電話しているみたいですね。でもね、誰かに「この人に頼んだらどうや」と言われるのが嫌やから、自分で決めるということでした。浦山さんも、こちらのやり方というか、意図をよく汲みとっていただいて、そんなに口出しもせず、見ていてくれたという感じがありがたかったですね。

—— 浦山さんとは、事前にお会いして飯食ったとかあるんですか。

加藤氏 電話して、とりあえず家へ行ったんですよ。あの人、町田だったかな。家にお邪

魔して、お願いをして、OKをいただいてということがありました。よくOKしてくれたなと思いました。あの頃は、それこそ安全牌をという感じじゃなくて、とりあえず、いってしまえみたいな。これは時代かも分からないなあとと思いますね。私の後輩だった男が、やっぱり同じような方式でいろいろなことをやって、突然、誰かに会いに行くって、ヨーロッパまで寺山修司を追っかけたことがあります。「寺山修司さんに、私ちょっと、お願いに行ってきますわ」とか言って。それは競馬の特番の構成を寺山さんに頼む。「お前、寺山さん知ってんの」「いや、知らん」（と言うのです）。

—— どうしてうっとうしくなかったかと聞いたのは、私の後輩が構成を松山善三さんに頼んだ。松山さんの構成では、その頃、フィルムだったんですが、フィルムがつなげない。しょうがないから、松山さんのところに断りに行きました。そしてオンエアしたら、翌日、松山さんから電話がかかってきて、「私の構成のほうが良かったと思うんだけど」と言って。外部の人に構成を頼むのは、これはディレクターとしても、嫌なこともたくさんあるなと思ったんです。

加藤氏 浦山さんは、幸いそんなことはなかった。あの人、酒ばかり飲んでますから。

—— 松山さんはもうちょっと真面目にね、自分でちょっと考えられたところがあったからなんですよ。

加藤氏 なるほど。そりゃ、そうですね。

—— 質疑応答に入っております。今日はオブザーバーが二人来ておられます。辻則彦さんとおっしゃいまして、元・大阪日刊の記者、日刊スポーツで文化をずっと書いておられました。今、宝塚に宝塚文化創造館というのがありまして、そこでいろいろなイベントを企画して実行してらっしゃる。もう一人、私どもの会社の後輩で、今、CS 推進局局長の鈴木優と申します。今回、いろいろな資料を関西テレから出してもらうために、彼が非常な努力をしてくれまして。お配りした資料は、私が番組を見ながら作ったあらすじなんですが、喧嘩が結構、面白い。「一年一組」のあらすじにも書きましたが、(番組の中でよく登場する) てっちゃんとしんや君はソリが合わないんですね。ずっと最後のシーンまで、決闘のシーンがあるんですよ。どうしてもソリが合わなくて、先生がとうとう二人を運動場に出しちゃうんです。カメラが本当に付かず離れずなんですよ。さっき言われました、夏休み明けのシーンはロングなんですが、この決闘のシーンはそこまでロングじゃないんです。(カメラは) 離れたところからそっと見ている感

じ。その2人に、微妙な心の変化が、2人の動きとか顔に出てくるんですよね。そのシーンが決闘の音楽があるんですが、音楽を担当されたのは、林光さんでしたか。

加藤氏 林光さんに番組を見てもらって、そのシーンが来たら、「あっ、ここ私書きます」って。「そうですか。お願いします」というそんな感じでした。

—— 全編の中で、音楽が付いている部分は割合少ない。

加藤氏 少ないですね。でも、あそこは「ここは、私書かせてください」とおっしゃいました。

—— どんな音楽かという、ダンダダダンという「ボレロ」のような、あんな感じの音楽なんです。いかにも決闘だ、みたいなね。これも感じました。それから両親が在日朝鮮人の家庭を訪問するシーンがありましたが、あの辺の^{くぎり}件というのは、特に問題はなかったのですか。家に行ってしまうというのは。

加藤氏 全然問題ない。私らも全然、そんな意識ないから。平気です。別にね、その在日の問題をやるわけじゃないから。

—— ですよ。でも、向こうから勝手に言い出しますよね。それはお父さん、お母さんと仲良くなって、その話が出てきたんですか。

加藤氏 いえいえ。先生が行っているからね。先生に言っている。

—— 35年前の映像ですよ。今現在の「一年一組」の人を追っかけたら、どうかなという気もするんです。どうなっているんだろうかという。

加藤氏 大震災（1995年1月）の直後だったんですが、被災者になった人が多かっただろうということで、私の後輩の堤田君がもういっぱい、撮っているんですよ。このクラスの子供たちが大きくなって、鹿島先生と一緒にというのを、もう1本作っています。それは私も見ましたが、懐かしい。だいたい予想通りの大人になっていました。

—— 普通のパターンですかね。

加藤氏 まあそれは、もちろん興味はありますが、私はやりたいという風に思わない。

—— 加藤さんがお作りになったドキュメンタリーでね、さっきもちょっと伺った養子縁組のとか、「家」とかね、ずいぶんたくさん拝見した覚えがありますが、加藤さんご自身はどれが一番好きですか。

<最後のドキュメンタリー「雨～大台ヶ原の自然と人間」に人間嫌いのニュアンス滲む>

加藤氏 私は、最後に作りました「雨」が好きなんです。あれが最後に作ったドキュメンタリーなんです。どういうんですかね。ある種、人間嫌いという感じが後半出ていましてね。人間の命は地球より重いか言いますが、本当かな という風に思いましたし、人間の命でも、やはり赤ん坊の命が大事やなという感じとか。まあ、いろいろなことがありまして、ちょっと人間を撮るのが嫌やなという感じがありました。それで「雨」というのをやろうとしたんですが、これも、うちの会社にとっては大問題でした。途中でね、ストップがかかりそうになったんです。だったらいいよ、もう止めるわって言ってね。

—— どんな風に大問題になったんですか。

加藤氏 例えばリポーターに吉永小百合さんを使ったらどうだろうかとか。そんなんやったら、やめようと。それはやっぱりスポンサーの問題とかいろいろあって、それは分かるよ。非常にもちろん善意で。

—— 「雨～大台ヶ原の自然と人間」（1989年放送）は、現在でも放送出来るでしょうし、世界でも放送できる普遍性のある作品だったと思います。

【注】「雨～大台ヶ原の自然と人間」（1989.2.26放送）

近畿の屋根・大台ヶ原は、“ひと月に35日の雨が降る”と言われているほどの多雨地帯。ドキュメンタリーは降り続く雨が主人公である。雨の中で展開する自然のドラマを描く。

ナレーター：小林稔侍 音楽：藤山節雄

資料「加藤信夫 ドキュメンタリー」より

加藤氏 いや、あれは自分の中での凄く苦勞したんです。あれは人間がいないからなんです（自然が対象で人間が登場しない）。思い出しますと、1回目の編集で1時間45分ぐらいになったと思うんです。それを編集マンと二人で流して見ました。二人ともひっくり返ったんです。こりゃあかん。こんなもん、放送出来

へんわ。というのが最初に見た印象でした。もう頭抱えてね、どうしようこれ、放送日が迫ってきている。それで、俺、もう一晩考えるわ。日にちがないので、翌日やり直さないといかんのです。なぜだったか分からないんですが、いわゆる美しいカットはみな落とそうという結論になったんです。カメラマンもなかなか巧みな男でしたから、いっぱいあったんですよ。そのシーンとカットをみな落とすということで、全部最初から落としていって、1時間10分ぐらいになったんですかねえ。それで通して見てみたら、「あっ、出来た！出来た！」と大喜びでした。これは嬉しかったですね。今でも私はあの嬉しかったのを覚えています。あとはもう一気に編集が終わったんですが、そこまでがね、これが最後の作品のくせに気が付かないんですよ。美しいシーンとか、綺麗なカットとかいうのに、まだ執着している俺って、何やろとね。そのときに、今は亡き浦山さんに怒られるかなと思いました。お前何をしているんだって。

—— 関西テレビが、去年（2013年）、「みんなの学校」というやっぱり学校を扱ったドキュメンタリーを作られて、なかなか良い作品でしたが、ご覧になりましたか。

加藤氏 はい、見ました。

—— ご感想は。

加藤氏 私はあんまり良くないと思っています。あれはやっぱり撮りやすいものを撮りすぎだ。あれは楽をしすぎ。

—— 校長先生を美化しすぎている感じですか。

加藤氏 はい。

—— 賞を珍しく、うち（関西テレビ）が取りまくりました。芸術祭の大賞をはじめ、海外など20いくつ取っています。最近、うちは良いニュースがほとんどない中で、誇らしい受賞をしたドキュメンタリーではありますが、加藤さんの辛口はよく分かります。

加藤氏 やっぱりあれは、品質的に問題あるなという風に思います。

<周辺の“常識”とやりに反旗を翻したドキュメンタリー「家」>

—— 普通の生活、普通の人々の中からドキュメンタリーを見つけるということが、加

藤さんのずっと貫いてきたスタイルみたいなんですが、この「家」というのもそうなんですか。

【注】「家」(1986. 6. 29)

家が商品となった現代、世界的な建築家(安藤忠雄)と依頼主のあるサラリーマン一家の、ささやかな家づくりを通して家の真の意味を問う。

ナレーター：山本 学 音楽：藤山節雄

資料「加藤信夫 ドキュメンタリー」より

加藤氏 「家」というのはね、ちょっと私も小さな家を建てましてね。入れ代わり立ち代わり、職人さんとかいろいろな話をして、出来上がったわけ。お金の面以外は、もの凄く楽しかった。家建てるって面白いなあ、よし今度はこれを撮ってみようと思ったんです。あの頃、安藤さんは有名でも何でもなかったんです。私がたまたま、何で知ったんやったかな、忘れましたが、突然電話して、事務所へ行った。怖い人やでという風に聞いていたんですが、行って、これこれだね、家というドキュメンタリーをやりたい、安藤さんがOKをくれるなら、ここでね。ここからやりたいといろんな話をしたんですよ。20分ぐらい話をされていて、この人面白いなあと思うのは、NHKの「Nスペ」だったか「NHK特集」かな、そこから話が来てるが、それ断るわって言うてくれたんです。それでやろうという話になって、やったんですよ。さてこれも何から撮ったら良いのか分からない。どこから入ったらいいのか分からない。最初、ちょっと今まで彼が作ったというか、今作りつつある家とかを見ていたんですが、どうも違うなあ。あるとき、事務所までぐるを巻いていたらね、野口夫妻(家の依頼主で出演者)が現れたわけ。「何、何」って聞いたら、「小さい家作ってくれて言うてんねん」「それや!」。それで始まったんです。野口さんもOKで、取材を始めました。

——— 家の中で傘をさす、不思議な家でしたね。

加藤氏 だから、あれもそういう、ある種、ラッキーさみたいなのがあって出来たという風に思っています。あれも安藤さんを撮るという感じではなくて、というつもりでやったんですけど。

——— 結果的に断ったNHKでね、教育テレビで放送されてしまうんですね。

加藤氏 あれも面白いといえば面白い世界というか。あれも実はうちの会社では、私が家を建てるドキュメンタリーをやりたいって言ったら、あのときの部長は大反対で

した。何を考えているんや、お前って。家を建てるってドキュメンタリーになるかと。冗談言うなよと大反対です。だから私は密かに行っていたんです。こそこそと。しゃあないなあと。撮っているうちに認めるかも分からないと思って。それはやっぱり家を建てるということが番組になるということが、まだ当時、信じられないという感じですよ。

—— やっぱり何かの出来事とか、大きい事件とかが取材対象でないと。

加藤氏 むっちゃ、けったいなものを建てるとかというんだったら別だったんでしょうが。という感じだったね。社内の反応は。それほど常識的な反応でした。

—— 例えば、「一年一組」では、教育問題を扱うつもりはまったくなかったということですが、あの作品を見ると、やっぱり教育問題、見る側は教育を考えますよね。それから、例えば在日の問題も考えるでしょうし、いろんな社会問題を、出来た作品を見ると考える。ということがありますよね。

加藤氏 そうですよ。私は押し付けるつもりはないですし、ここが問題なんだということも言いたくもないです。私もそんなの分かりませんしね。それは結局、見ている側の方がいろいろな受け止め方をしていただいたということだろうと思います。

—— カメラを持っていかない勇気と恐怖という話を聞きました。

加藤氏 それねえ。後輩たちにはいつも言っていたんですが、撮り逃したとかね。それから、どういうケースでもいいんですが、若い二人が付き合っていて、身障者とかいろいろ問題があって、結婚式。結婚式といたら、絶対取材に行かなあかんって思い込んでいるんですよ。「なんで結婚式なんか。セレモニーやからやめとけ」と私は言う。「こんなん行かなかったら番組になりません」。

—— 普通、そう思いますよね。

加藤氏 セレモニーの取材って一番つまらないんですよ。あんな虚飾というか、嘘だらけの世界やからね。そんなんやめといたら言うんだが、でも行く。絶対行かなあかんって思い込んでいるわけです。なんでそう思い込むのかが、私にはよく分からない。そういうケースが非常に多いんですよ。そしてそれを使って失敗しているという番組が。もしくは偶然行けなかったほうがいいのかというね。だから、よくね、撮れなかったと嘆いていると良かった、良かった、それで良かったんや

とよく言うんです。それは、撮れすぎるといふことの馬鹿さ加減なんですよ。撮れすぎたらね、もうダメ。最初から最後までバラの花が咲いている、そんな番組はあかんよと言っているんですが、皆はそれが欲しくてしょうがないんです。でもね、バラの花がズラーっと並んでいたら、バラの花の値打ちはなくなんねん、やっぱり。それをもうちょっと考えないということなんだが。私も最後に作った「雨」のときに、怪我をしたテンを籠に入れて治療してやるという。最後は逃がすんですが。私はね、そのときに籠で治療してやる場所はもちろん撮れているわけですが「この次、私ら何日に来ますからね。このテン、絶対置いといてくださいよ。そのとき逃がしてくださいよ」と言っているわけですね。ということは、逃がしてやる場所を撮りたいわけですよ。ところが、一週間ぐらいして行ったのかな、籠を見たら空っぽや、もういないじゃないですか。「もう治ったから逃がしてあげたよ」。これで、ええやんかとそう思った。じゃあ、しゃあないな。空っぽの籠を撮るところよ。それで十分なんですよ。たぶん逃がしてやる場所を撮っていたら、浦山桐郎いわくのおいしいシーンになって、またぞろ怒られているやろうなという感じなんですよ。それは結果的に良かったんですが、いまだに俺、そんなことやっているんやなと思った。それほどね、恐怖と裏腹な話なんだが、やっぱり、なんでもかんでも撮れてないと怖いということなんですね。それは、なるべく物理的に撮れないというのが一番ラッキーという感じですからね。

—— かなり原点に戻りますけど、ドキュメンタリーをやりたいと思って関西テレビに入られた。なんでドキュメンタリーをやりたいというように思っておられたんですか。

加藤氏 なんでかな。あまり私ね、ドキュメンタリーって知らなかったんですよ。見てもいなかったんですが、小さい頃に見た記憶として、「山びこ学校」(1952年公開)という映画がありましてね。原作は無着成恭先生かな。かすかにしか覚えてないんですが、あれが凄く自分の中にずっと残っていました。ドキュメンタリーじゃないんですよ、映画なんです。ああいうことをやりたいなというのが、なんとなく続いてありました。それとか、中学時代に見た、「砂漠は生きている」とかそういう世界とか。フィクションよりも、ノンフィクションのほうをやりたいなあという感じはありましたが、入社して10年間出来ませんでした。

<前足バラバラの馬を中継カメラが追う>

それともう一つだけ、先ほど触れた競馬で1点、言っておきたいことがあります。あるとき、日経新春杯だったと思うんですが、ゴール前で4コーナーとゴールの間ぐらいですかね。骨折した馬がいて、先頭を走っていたんです。で、骨折して、

ガーンと倒れたんですが、そのレースを撮ってましてね。ゴールインはもちろん、ゴールまではレースを追ったんです。それから骨折した馬の、前足だったんですが、前足がブラブラになってね。立ち上がって、それを撮り続けた。そして、後で無茶苦茶、非難されたんですよ。残酷やとって。何が残酷なんか分からへん。どこが残酷やねん。だけど、残酷だという視聴者の意見、それと他のこともいっぱいあって、うちの会社もいろいろ問題になったんです。私は競馬ファンだったら、これを見る義務があると思っていましたから。そういう意味では、見せつけるというか、そういう意味でそれは撮りました。ある種、見ている人に挑戦をしたいという感じかな。俺は百貨店の店員じゃないぜという感じもありましたし。競馬会からもいろいろ言われましたが、でも皆、生き物が走っているのを見て楽しんでいるんでしょ。これは生き物だということじゃないですか、いうことで私はやりました。これもいろいろ問題になって、たしか日刊スポーツだったと思いますが、囲みの記事を書いてくれました。あれは良かったというね。私は競馬欄で嬉しかったんですけどね。感激しました。ああ良かったってね。そういうことを残酷だとか、可哀そうだとかいうこと自体が間違っているよということ、やっぱり。私はある種、視聴者に見せつける必要があるという風に思いましたから、それでやったんですが。世間の常識からは外れることかもしれませんが、私はそういうときに、テレビというものが持っている使命とは一体、どういうことなのかと考えるんです。オーバーに言いますとね。視聴者は王様だという考え方はやっぱり間違っているのではないかと。視聴者におもねるということが、本当に視聴者を大事にしているということにはなっていないのではないかと。今のぼかしとか、いろいろなのを見ていますとね、これは一体何事なのか。皆、おだやかに、おだやかに、何事もなく、楽しくいきましょうよということ言ってるんじゃないかと思えます。そうじゃないでしょうということですね。

——— 最後、常勤監査役でしたよね。そういうことを言い続けていたんですか、社内でも。

加藤氏 言うてました。しかし監査役がそんなこと言うてはいけないうて言われて。

——— 私はそのとき秘書でしたけど、まあ加藤さんだからなあ、と皆がそこで納得して。

加藤氏 コンプライアンス上の問題になりますよとかいって。そういう時代なんですけど、それははたしてテレビのためにはなっていないという風に私は思っていました。大勢はそう思っていないみたいですが。

—— 「一年一組」を拝見いたしました。羽仁進が撮られた「教室の子供たち」（1955年、岩波映画）という作品は、やっぱり子供たちがカメラに慣れるまで回さなかったというので話題になった記録映画です。教室の子供たちを生き生きと映し出した名作です。

冒頭、ドキュメンタリーは真実ではないというお話をされたんですが、私は作者が切り取った事実とか真実ということで、そのメッセージ性が非常に強いケースと、加藤さんがおっしゃった、何かを見ていただいた人に示したいとか、考えていただきたいという非常にソフトな形と、この二つのパターンがあるかなと思うんですよ。大島渚がノンフィクション劇場で作った作品が最近、再放送されたんですが、傷痍軍人を記録した作品です。これを見ると、強烈なメッセージ性、プロパガンダに近いものが伝わってきます。一方にはそういうものがありながら、静かに、沸き起こるような形で作者のメッセージが伝わるパターンがありますね。だから、私は虚の世界じゃなしに、やっぱりノンフィクションの世界で、事実・真実を作者が切り取って伝えているんだと思うんです。その辺のところは、専門家の間で議論がまだまだあります。感想ですけど。

<ドキュメンタリーは「虚」の世界

～事実の一部であっても全体を通して真実というには抵抗ある～>

加藤氏 私は、虚の世界というのは、言い方としてはきついかもしれませんが、虚というのは一部を放送しているからなんですよ。ある種、もっと極端に言いますと、自分が好きなシーンばかりをつないでいるとかね。動きが激しいシーンばかりをつないでいるとかいうことでは、虚ではないかという風に思いますね。でもそれは事実なんですよ。事実の一部ではあるということは間違いありません。これを、全体を通して真実だというのはやっぱり抵抗感があるなという感じはありません。

—— その人のすべてではない。ほんの一部でもそれが事実であり、一面であれば。

加藤氏 鹿島先生が、「あれは私じゃない。立派すぎる」と言う。それはひょっとしたら、立派なところだけをつないだのかも分からんという感じかもしれません。私はなるべく鹿島さんをスーパーマンにしたくなかったんです。例えば馬場君という問題児を相手にしていて、教室からやっとな帰って行くと、（先生が）ため息をもらっているんです。このため息だけは絶対入れないと、と思いました。そんなに偉い人に見えたら、私も困るなあと思ったから、なるべくそのようなシーンは残すようにしないといけない。

——— それでも、あの先生は偉い先生に見えますよね。

——— 例えば教室で何度か喧嘩をする。そのカットを、限りなく引いたロングの絵で捉え続ける。そうすると、他の子供たちが喧嘩のシーンをどういう風に見ているかということも含めて、全体が見えてくる。しかし、2人をクローズアップすると、けんかをしている周りがどうなっているのか見えてこない。

最近のクローズアップ、ドキュメンタリーもニュースもそうですが、クローズアップが多いんですよ。やっぱり引いた絵で全体を見せるというような作り方をしていかなければいけない。それから、生放送なのに生でないというのも、やっぱりこれは明らかに作り手側の怠慢というか、テレビというものをもっと深く考えてほしいですね。

加藤氏 でも、やっぱり、スタッフの努力は、生でない方向にしか働かないんですよ。全員、そう努力しているんです。ミスをしなないようにとか、分かりやすいようにとか、努力はもの凄くしているんですよ。だけど、その努力は無駄とちゃうかといつも言っているんですよ。だから、金がかかるんじゃないかと。その努力はいったい何なんだろうという風に思っています。パターン通りに仕事をするのは楽なんですよ。考えること要らんですから。私が制作部長のときに、企画書を出せと言ったら、司会陣は必ず男女2人や。「これどういうことなの、君が考えたのか」「違う。他の番組でも、いっぱいそうやっているから」「冗談じゃない、お前」というようなことが多すぎるんです。だから「お前の考えたのは、いったいどこななのよ」と突っ込んでいくと、皆、継ぎ合わせや。それで企画と言えるんですか。でも本人はそう思っているわけ。これでは、教科書を継ぎはぎだらけにつないでいるだけで、どうするのと思うんですが、それ以上本人はもう出来ないんですよ。もう1点だけ、私がやったドキュメンタリーの中で、非常に印象的なことを一つだけ話しておきます。神戸の通称「チロリン村」というところで、アルコール中毒から脱出しようとして頑張っている方たちの記録なんです。アルコール中毒というのは全然知らなくて、その中に飛び込んでいったら、まあ普通の人たちなんです。びっくりするのは、皆、カメラに撮って欲しいんです。もう皆、「俺も撮ってくれ」と言う。撮ってくれないと、なんであかんのかと迫ってくる。撮ってもらって、アルコール中毒やということを知りたいわけですよ。知られたい。だから飲まれなくなるということなんです。女の方はね、撮られたくないんです。だから治らないんですよ。という、恐ろしい社会ですね。

——— (カメラに) 撮られることによって、それを歯止めにした。

加藤氏 そう。歯止めにしたい。ここにワッペン付けて暮らしたいくらいのものや。そういう世界なんです。だから立ち直るってことは、大変なことなんだ。その中で、ある50がらみのおっちゃんが、半年ぐらい酒飲まんとして頑張っていた。それがあるとき、一人暮らしのアパートでぐでぐでんになっちゃって。皆、仲間の人たちが心配して、また精神病院に連れて行かなあかんと、また車に乗って、取材クルーも後ろから追っかけて行った。そしたら、前のタクシーが酒屋の前で止まった。世話をしている、ある小さな会社の社長が、つかつかと酒屋の中に入っていき、大慌てでカメラが追いかけて、そしたら、ウイスキーのポケット瓶を買ってるわけですよ。どうするんだろうと置いていたら、ポイと渡すわけ。

——— そのベロベロ（の50がらみのおっちゃん）に。

加藤氏 そう。それをガーって飲んでね。飲ませてあげるわけや。これから飲まれへんからと。さあ行こかといって、精神病院にダァッと行く。これは、撮りましたけど、ドラマでは出来へんな。シナリオライターがなんぼ優秀でも、このシーンはよう書かんやろ。これはドキュメンタリーでないと無理だなという風に思いました。そういう意味では、アル中の人のドラマというのは、いっぱいあるけど、そんなシーンは絶対がない。それは想像力が及ばない。私らも及ばない。想像力が及ばないシーンが一番ええわな。おうと唸りましたけど、それはたまたま撮れて良かったんですけど、そういうことで、予定調和というか、予定通りに進行したもののつまらなさということは、私は肝に銘じないかんなど。

——— 今日いろいろと伺ったような話が、今現場で行われると、面白い番組が出来るんじゃないかなという感想を持ちました。最後に。よくテレビを見てらっしゃいますよねえ。

加藤氏 割かしね、見てますけど。

——— 年寄り向けの番組が果たしてあるのかというのが、最後の締めくくりに皆さんに伺っている質問なんです。

加藤氏 年寄り向けの番組とは、どういう意味なんですか。

——— 72歳でいらっしゃいますか。よく見ていらっしゃる。全然見ない人と、よく見ていて人と二通りに分かれるんです、結構。年寄り向けの番組というのを、今、テレビ局は作っているのか。年寄りは何を見て、どんな番組を見て楽しめばいいん

だ。テレビは年寄りに親切じゃないじゃないか、という。

加藤氏 私は、あんまりそうは思っていない。まあ、割かし、いろいろ不満はあるよ。全体的に不満はありますが、かなりセレクトして見ていることは確かでしょ。まあ、面白いかなあ。

—— 地上波をよくご覧になりますか。

加藤氏 地上波もBSも同じぐらいずつかな。

—— そうですね。特に好きな番組は。

加藤氏 ドラマはよく見ている。ドラマは私、好きだから。

—— 「バイキング」(フジテレビ・情報番組)とか言ってください。

加藤氏 「昼顔」(フジテレビ)。「昼顔」面白いやんか。この間、始まったばかりやけど、井上由美子さん。なかなかの出来ですよ。それぞれ皆さん、好みは違うから何とも言えないんだけど。私、「軍師官兵衛」なんかも見ているよ。いろいろ突っ込みながらね。なんでこんなところで、……聞こえるやろかと。こいつアホな演出やなとか思いながらね、見ていますけど。それは、昔も今も同じやからね。下手なもの下手やからしゃあない。

—— 最後に、ダメ押しで、この話をもう1回していただきたい。今のテレビ、コントロールしやすい人材、番組作り、誰からも非難されない方向へ走っている、安全を求めてテレビ、放送とは、様々な外部批判の恐怖に耐える覚悟がなければいけないんじゃないかなと。ドキュメンタリーだけではなくて、どんな番組もそうではないか。それぐらいの番組を作っていないとテレビの未来はない。

加藤氏 ないやろね。そう思いますね。それはやっぱり、ある種、さっき百貨店化しているという風に言いましたが、まさにそういう風に思いますね。テレビ局がもっと貧しくなると、もうちょっと良い番組が出てくるやろなという風には思いますが。今の状態が続く限りは、難しいやろなと思いますね。やっぱり、事を起こしたくないわけでしょ。それは社員。新入社員から始まって、全員そうですよ。なんとかこのまま何事もなく行きたいというのが望みやから。大それた望みを持っているやつなんていないんじゃないの。俺は世界一のディレクターになるんやと、そ

んなやつ来えへん。または選んでいないと思う。そういうことがどんどんどんどん効き目が出て来て、皆、よく言うこと聞くでしょ。よく言うこと聞くし、黙ってややこしいことはやらないし。一つ言いますとね、さっきの私一人だから出来たって言いましたが、例えば、音楽を生中継で入れる。これね、今の子だったらどう言うか。それを思いついたとしますね。必ず誰かに報告する。そしたら、そいつが止めるわけや。残念ながら、止められたから出来ませんでしたと言うわけ。これが一番賢い方法。そんなん言うたらあかんやんかという風に私は思うんやけど。必ず相談する。それを言うということは、止めて欲しいわけや。怖いから。でも思いついたことは、いいこと思いついたでしょ、とそういうことや。今のディレクターは皆、そうだよ。皆と言ったら語弊がある。たいてい、そうです。皆に相談したら、そうなるやん。皆、集団で今、物事を決めているから。集団で決めたら、安全な方向に行くに決まってるのよ。

——— コンプライアンスの問題でも、同じことがありそうな気がしますね。

加藤氏 そうですね。私はそう思いますね。だから、自分ひとりでは自信がない。

——— これは怖いなあというものを、作っていないということですね。

加藤氏 そんなこと現われてきていないでしょ。

——— 現役のコンプライアンス担当ですけど、必ず上司に相談しなさいと放送倫理会議でいつも徹底しているんですが、そもそもそれがあかんのですかね。

加藤氏 だから、出来ないわけ。部長時代にいつも言っていたんですが、「君、何が怖いのか」ってよく部員には言っていました。「何か怖いわけ、それをやったら、君、首になる、ならへんよ。大丈夫だよ。俺がやれと言っているんだから、やれ。いいよ、俺が責任を取るから」。それでもしない。「いや、部長、それは過激ですから」とか言って。俺が諫められている。そういうことが多い。皆さん賢いから。そういう教育している、会社も。ますますそうなる。だから当然ですよ。皆、今、勝手に自由自在にやりなさいと言われても、皆、困るんじゃないか。呆然としている。君、お金あげるから、自由に好きな番組やりなさいと言われてたら、皆、お手上げや。たいていそうだと思う。

——— というあたりが、今、テレビ局が抱えている課題でもあり、問題でもあり、これをどこかの局がまた原点に戻ってですね、新たな出発をするのかなというところ

で、ちょっと時間をオーバーしましたが、今月の例会を終わりたいと思います。加藤さん、どうもありがとうございました。

以上